

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

マリカ・モカデムと不穏な小説--母と娘と嬰兒殺し

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/472

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



マリカ・モカデムと不穏な小説

——母と娘と嬰兒殺し——

武内 旬子

はじめに

母娘間の心理的葛藤やその克服の難しさが、娘の側から、「母殺しは難しい」と表現されることがある。¹ ナタリー・エニックとモニック・エリアシェフが『だから母と娘はむずかしい』²において西洋文化圏のフィクション（主に文学作品だが、映画やテレビドラマなども含む）を対象に、ありとあらゆる母娘関係のパターンを整理し、それぞれの特徴を並べてみせた後となつては、少なくとも西洋のフィクション作品に登場する母娘関係でこの中に類似パターンを見いだせないものはないのではないかと言いたくなる。しかし、「母を殺す」ではなく「母が殺す」物語が娘によつて語られる時、それは何を意味することになるのだろうか。「母を殺す」物語に対立するものなのだろうか。あるいはその一変形なのだろうか。しかも、表現される言語はフランス語であり、西洋の小説の形式を持ちながらも、西洋世界に属していない「母」が問題になる場合は。そして何より「母殺し」という言葉が当然のこととして「象徴的母殺し」を含意しているのに対し、現実の殺人が関わってくる場合には。

マリカ・モカデムは1990年に自伝的要素の濃厚なフィクション『歩く人々』³

1 たとえば、齋藤環の著書『母は娘の人生を支配する』（NHK出版 2008年）の副題は「なぜ「母殺し」は難しいのか」。

2 Caroline Eliacheff et Nathalie Heinrich, *Mères-filles, une relation à trois*, Albin Michel, 2002. 夏目幸子訳『だから母と娘はむずかしい』、白水社、2005年。

3 Malika Mokedemm, *Les hommes qui marchent*, Ramesay, 1990.

で作家としてデビューしたが、その後、5作のフィクションを経て⁴2003年と2005年に、「小説 (roman)」と銘打たれていないテキストを発表する。それぞれ『不服従者の恍惚⁵』（以下『不服従者』と略）『私の男たち⁶』（『男たち』と略）というタイトルを持つこれらのテキストでは、一人称の語り手は作家と同名であり、内容的にも、これ以前のモカデム作品やインタビューなどを知る読者には無理なく「自伝」として読めてしまう。90年の『歩く人々』は匿名の語り手による「三人称小説」の形式を持ち、語られるのは作家と異なる名前を持つヒロイン（レイラ）の10代後半までだった。それに対し、『不服従者』では「私」の現在と子供時代からアルジェリアを出るまでとが交互に語られ、『男たち』では子供時代から現在までがほぼ年代順に語られる。そして、この2作について2008年に発表されたのが、再び表紙に「小説 (roman)」と銘打たれた『すべてはあなたを忘れたおかげ⁷』であり、「母が殺す」物語が語られるのはこの小説においてである。⁸

マガジン・リテレール誌に掲載されたアレクサンドラ・ルマソンによるこの小説の短評は次のように締めくくられている。

「譲歩なしの書物。この中でマリカ・モカデムは一つの国、彼女自身の国を激しく非難しているのだが、さらにいっそう激しく非難するのが一人の女、彼女の母なのだ。彼女の判決は最終審である。彼女の本は衝撃的だ。」⁹

この短い文章から読み取れるのは評者が内容をモカデムの自伝と断定して読んでいることである。テキスト中の「母」は作家マリカ・モカデム自身の母に他ならない。また文体上、「国」と「母」は同格におかれている。どちら

4 第6作までのモカデム作品については拙論を参照されたい。「マリカ・モカデム 砂漠からエクリチュールへ（前）（後）」、『神戸外大論叢』第53巻、第5号および第7号、2002年。

5 Ibid., *La transe des insoumis*, Grasset, 2003.

6 Ibid., *Mes hommes*, Grasset, 2005.

7 Ibid., *Je dois tout à ton oubli*, Grasset, 2008.

8 なお、これまでに発表されたモカデムの作品中、表紙に「小説 (roman)」と印刷されていないのは『不服従者』と『男たち』の2作のみ。

9 Alexandra Lemasson, “Je dois tout à ton oubli, Malika Mokeddem”, in *Le Magazine littéraire*, no.477, juillet-aout 2008, p.29.

もまず不定冠詞付きの名詞として現れ、直後に言い換えられる。「国」の方は「一つの国」の直後に所有代名詞（「彼女のそれ」）、「母」の方は、まず「一人の女」でその直後、所有形容詞をつけて言い換えられる（「彼女の母」）。どちらの場合も、「彼女の」という所有関係が強調され、このテキストで問題になっているのが、作家モカデムの「国」や「母」であることが強く印象付けられる。

しかし、果たしてそうなのだろうか。

また、「彼女の判決は最終審（“Son jugement est sans appel.”¹⁰）」の部分では司法用語が比喩的に用いられている。このテキストは、「母」によって犯されたとされる嬰兒殺しに対して娘の下す、これ以上くつがえる可能性のない、最終的な審判なのだ、という意味に解釈できるだろう。だが、このテキストは娘による母の断罪であると、それこそ“sans appel”（控訴なしに、決定的に）に言い切ることができるだろうか。

もちろんルマソンの文章は全体がほんの15行ばかりの短評であり、筆者が意を尽くして書けるような条件のものではない。ただ、ある種の読み方、ストレートに自伝として読む読み方を典型的に示しているとは言えるだろう。本論においては、こうした読み方を踏まえつつも（後述するようにそれは決して無理な読み方ではない）、このテキストが、娘による母の断罪という「要約」をはみ出してしまう部分をも考慮にいれて読み解くことをめざしたい。「小説」と銘打たれ、匿名の語り手が三人称で、作家とは名の異なる主人公（セルマ・ムフィド）の物語を語る形式は、もう少し注意深い読みを要請すると思われるのみならず、容赦ない断罪とそれを裏切る語りとのせめぎあいこそがこの文学テキストを成立させていると考えるからである。「譲歩なき」、というよりは様々に仕掛けられた「譲歩」にこそ注目していきたい。その上で、完全文の形をとった長いタイトル（文字通りには、「私は全てをあなた

10 この表現は次のような強調の意味でもよく用いられる。“Le publique a comdamné ce film sans appel.”（観客はこの映画をぼろくそにくさした。）（小学館仏和ロバール大辞典所収の例文。）

を忘れることに負っている」と訳せるだろうか)の意味を考えていきたい。

最初に「原光景」ともいえる嬰兒殺しの記憶のテキストへの書き込まれ方の特徴および、主人公セルマのそれに対する反応を分析する。次に登場人物セルマではない読者による解釈の可能性を考察する。3章では先行諸テキストを踏まえた読み、4章では個人的ドラマと社会的問題の関連を見た上で、母との関係を書き直す試みという視点からの読みを提出したい。

1 記憶の回帰

『すべてはあなたを忘れたおかげ』(以下『すべて』と略)はイタリック体で印刷された8行のパラグラフで始まる。

「白い枕をつかんだ母の手が、ザヒア叔母のかたわらの床に横たえられた乳飲み子の顔にそれを押し当て、押しつけ、押しつける。クッションの上ののしかかり、押しつけ続けるこの手。腕の付け根から足先までおくるみでくるまれた赤ん坊の、ほとんどわからないほどの痙攣。すべてを凍り付かせるかのようなザヒアの眼の、声なき叫び¹¹。」

イタリック体はこのパラグラフにのみ使用され、この後文章は1行の空白を経てセルマの現在を語る語りへと続いて行くため¹²、このパラグラフの「異質性」が物理的にも浮き彫りにされることになる。このパラグラフの直後、セルマが身震いし、これは悪夢なのか、自分は眠り込んだのかと自問する一節があるため、一見、セルマの見た悪夢の1シーンとも受け取れる。ところが、第1章¹³は一種の円環構造を備えた語りになっており、これが眠り込んで見る悪夢ではなく、無意志的な記憶の回帰に他ならないことが、この章の最後になって判明する。

モカデムの小説におけるマドレーヌは、携帯電話の画面に映し出された1枚の写真である。心臓病専門医セルマは、ある日、一人の患者が自宅で睡眠

11 以下、引用文に付した数字は *Je dois tout à ton oubli* のページ数。

12 なお、小説全体が基本的に現在時制で語られている。

13 小説全体は12章に分かれている。

中に急死したことを患者の夫から知らされる。夫はセルマに、携帯電話の画面を差し出し、死装束をつけた妻の写真を見せる。それは白い花嫁衣装だった。それを見た時「凍り付いた手がセルマの心臓の上で閉じた (16)」。セルマは失神しかける。理由はすぐには明らかにされないが、白い花嫁衣装が死者の足をくるんだ状態が、「向こう、砂漠で (16)」セルマがかつてよく眼にした、白い布でくるまれた赤ん坊を思い出させたことは語り手が指摘する。その後、自分の動揺を理解できないまま帰宅したセルマが脱力状態にいる時、「不意に幻影が否応なしに現れた¹⁴ (18)」。この直後、1行の空白をはさんで続く語り手の語りの中にセルマの見るものが現れてくる。

「そして何度も何度も、この無声映画が繰り返される。母の手、その攻撃、乳飲み子の痙攣、ザヒアの眼の絶望 (19)。」

自分がこのシーンを忘れていたことに気づいたセルマが呆然とするところでこの章が終わり、それに続く場面が冒頭の8行であったことが判明する構成なのである。

問題の場面は、子供時代を回想する次の章では、セルマのその時の反応と同じ文章中に書き込まれる。ここではセルマは、回想する現在の位置にいただけでなく場面の渦中にもいることになる。どちらにおいてもセルマの果たすのは「見る者」としての役割である。

「クッションをつかんで、ザヒアの赤ん坊の頭に置く母を眼にするセルマには声も出ない (23)。」

テキストはおよそ2ページにわたってこの場面を回想するのだが、その直後、問題の枕がフランスの病院などでよく見られるタイプの白いもので、子供時代に砂漠の生家にあったはずがないことに気づいたセルマはそれを、回帰する記憶の信憑性を疑わせる証拠と解釈する。こうしていったん、事実の記憶ではなく妄想にすぎないと結論付けるのだが、この否認は安心をもたらさない。今度は、そんな妄想をいただいたことに罪悪感を覚えるのである。

14 ここでは単純過去時制が用いられ、全体の現在時制の中で目立っている。

記憶の回帰は一挙にすべてを明らかにしはしない。テキストもまた一直線ではなく、記憶と格闘しつつあるセルマの現在および、生家を出てからの人生についての回想と絡み合いつつ進む。その過程で、今度は枕を包む白い布について「あれは屍衣だったのだ。あらかじめ枕を包んであったのだ。それから枕を出して小さな体の上にかぶせればすむのだ、死を見つめなくてもすむように (38)」と思いつく。これ以降、問題の記憶が否認されることはない。だが、この箇所は、冒頭の場面とは異なり、セルマが「見たまま」の記憶ではなく、枕の矛盾を合理的に説明しようとする解釈である（枕を白い布で覆う準備作業や「後始末」のシーンを目撃したと解釈できる記述はテキスト中に存在しない）。

いったん、回帰した記憶を記憶として受け入れると、

「徐々にセルマは自分がこの忘却に負っているものを意識するようになる。それは、彼女を構成するあらゆる拒否の、また、よくある母と娘の対立などでは全くない、母とのきわめて特異な関係の理由なのだ。この殺人以後、彼女は不眠症になり、逃げだし始めた (42)。」

ここでは「殺人」という言葉がはっきり出来事を指し示すために用いられている。さらに、ここでセルマ自身は不眠や母との関係を、殺人の目撃およびその忘却と結びつけていることを確認しておきたい。この点については後でもう一度取り上げる。

記憶を取り戻したと信じるセルマは「今後はこの殺人を名付けることを学ばねばならない (46)」、母と対決し、「母の知らないうちに娘が母と共有してしまったこと (46)」、すなわち殺人について母に問いたださねばならないと決意する。

そしてこの対決はあっさり実現する。全12章のうち第5章がそれにあてられているのだが、それまでのセルマの内面を語る緊張に満ちたテキストに比べ、拍子抜けするほど淡々とこの「対決」は語られる。20年ぶりに帰郷して、あの場面を見たのだと言う娘に対する、母の「どうしたらよかったというん

だい。すべてもみ消すしかなかったんだよ (71)」という短い返答は、緊張の頂点であるはずの場面で一種のはぐらかしのようにさえ読めるのではないだろうか。一冊の小説が半分も進まないうちに実現する対決の書き込まれ方については後述するが、このセリフの後セルマは黙ってしまう。母はこの対決などなかったかのように、セルマの結婚に備えてとっておいたという装飾品の話を始める。

セルマは欲求不満を感じつつもそれ以上追求できずに翌日帰途につく。テクストがその後の章で語るのは15年ほど前の母のフランス訪問や、今回アルジェリアからフランスに戻る飛行機で隣り合わせた女性のエピソード、また子供時代の回想などであり、語りは、事実であると確認されたはずの衝撃的記憶を避け、あたかもそこから少し離れたところを進行するかのようである。近いうちにもう一度帰郷して、再度母に話を聞くつもりだったセルマのもとに母の死の知らせが届くのが11章である。かつては、母が死んでも涙は流さないと考えていたセルマだが、いつのまにか涙がほほをぬらしていることに気づく。

「セルマは涙というものがこんなふうに静かに流れることができるとは知らなかった。涙は黙ってわき出て、恥と反抗を包み込む。この死の知らせは不名誉ゆえにあまりに長く抑圧されてきた苦しみを解放する (146)」この時点でのセルマの反応は「解放」という語に集約できるだろう。記憶の回帰にみまわれてからの緊張のみならず、「事件」の時点からの長年に渡る母との緊張関係からの解放。この状態で、葬儀には間に合わないものの、すぐにセルマはフランスを発つが飛行機の都合でオランで足止めを食う。語りもそこでの友人たちとの再会や青春時代の思い出などでまた足踏みする。最終の第12章で、母の墓参りをし、親族の女性たちとある程度話をするが、何一つ解決するわけではない。解放を感じた直後の状態から、この帰郷で何がどう変わったかについて読者に与えられる情報はほとんどない。帰途、オランへ向かう飛行機に乗れずに仕方なく乗った長距離バスが峠で故障し、沈黙

の中で立ち止まるセルマでテキストは終わる。

2 誰が誰に殺されるのか

匿名の語り手がほぼ主人公の視点からその内面を語るという形をとるこの小説を、では、主人公イコール作家と同定して読めるだろうか。そもそも回歸した記憶の場面に書き込まれているのは一体何なのか、セルマによる解釈とは別の角度からもう一度考えてみたい。

問題の場面は「母による子殺しの瞬間」とでも要約できるかもしれないが、殺される嬰兒がだれの子供かは冒頭のテキストには書き込まれていない。乳飲み子、赤ん坊という語は定冠詞を伴っているが、直接「母」という単語と結びついてはいない。また、「母」という語が主語にはなっていないことにも注意すべきだろう。最初の文では「母の手」がクッションを乳飲み子に押しつけるのである。続く文で「この手」と言い換えられているが、「母が殺す」というストレートな表現は回避されている。後になって読者は、この手の持ち主がセルマの母で、赤ん坊の産みの母は、セルマの母の隣にいるザヒア叔母であることを知る。ザヒア叔母はセルマの母の、腹違いの妹であり、最初の結婚で夫を失ったが、離縁された後（セルマにはそのどちらかはつきりしない）、セルマの住む家にやってくる。翌年そこで妊娠し、すでにおなかが大きくなった状態で一族の隣人と結婚する（「一族の隣人に与えられた(35)」）。ある日その夫が、妻は病気だと言ってセルマの家に連れてくる。その日のうちにザヒアは出産し（セルマはこれも目撃する）、24時間とたたないうちに問題の嬰兒殺しがあり、ザヒアは流産したことにされる。従って、後に得られる情報と共にこの場面を見ると、セルマの母は実子ではなく、腹違いの妹の子を殺すのであり、殺される子の母がその現場に立ち会い、隙間からのぞくセルマがテキストには直接登場しない視点人物となる。二人の母と二人の子。殺す者と殺される者、そしてそれを見つめる二人は殺す者の娘と殺される者の母である。なお、問題の事件は、砂嵐が吹き荒れる中でおこっ

たとえ、この場面が想起されるたびに砂嵐も言及される。自然の暴力が、母の暴力をいっそう際立たせる書き方になっているのである。あるいは、あたかも母の暴力が、砂嵐を引き起こしたかのようでもある。

もう一つ注目すべきは赤ん坊の性別である。母と対決するセルマが母に投げかける最初の質問は「あの（ザヒアの 筆者注）最初の赤ん坊は女の子だったの（70）」である。セルマ自身が自分の発したこの質問に驚き、それまで赤ん坊の性別のことなど全く考えていなかったのに、と言うのである。たしかに、テキストのこの部分に至るまで、セルマはこのシーンに関して様々に自問を重ねているのだが、赤ん坊の性別については問うことはない。またこの子供を指して使われる単語（多くの場合「赤ん坊 (bébé)」、時として「乳飲み子 (nourrisson)」) は女兒にもそのまま用いられる男性名詞であるため、テキスト上、赤ん坊の性別は明記されないことになる。こうした仕掛けがあってこそ、母に対する最初の問いが浮き彫りになる。

この問いはそれ自体、つまり殺された子の性別を問うという以外に何を問いかけているのだろうか。男の子か女の子か、という聞き方ではなく「女の子だったの」という聞き方であることに注目したい。セルマの無意識は、一般論として生まれてすぐ闇に葬られる嬰兒は女の子である、あるいはその可能性が高いと考えていると解釈できるだろう。イスラム以前のアラブ社会で女兒がしばしば嬰兒殺しの対象となっていたのをイスラムが禁止した、という言説はイスラムと女性差別が議論となる時にしばしば現れる。また、親が息子をえこひいきすることへの怨嗟に満ちているモカデムの諸作品の読者も、上述のようにずっと性別が明らかにされない書き方と相まって、抹殺されたのは女の子だったという考えに誘導される。母の答えによって実は男の子であることが判明してもセルマ自身は特にそれに反応していない。しかし、我々はこの問題を冒頭のテキストに関する一連の問いとつきあわせて考えることができる。

「母」ではなく「母の手」が、実子ではなく腹違いの妹の子を、女の子で

はなく男の子を、殺す。これを一種の安全装置と読むことはできないだろうか。この「殺人」が事実かフィクションかという判断は我々には不可能である。登場人物たちにとって、この事件は「事実」である。だが、作家の実体験がそのまま書かれていると前提せずに読み、上にも引用した「(事件の目撃とその忘却が) よくある母と娘の対立などでは全くない、母とのきわめて特異な関係の理由なのだ (42)」というセルマ自身の解釈をいったんカッコに入れるとすると、回帰する記憶は母と娘との困難な関係を生み出した衝撃的事件としてではなく、むしろその困難の究極の表現として読むこともできるのではないだろうか。モカデムはこれまで繰り返し「母に愛されない娘」というテーマを語ってきた。その原因を、嬰兒殺しの目撃という特異な事実に着させることができるなら、それはかえって娘を罪悪感から解放する。困難な関係の責任は全面的に母の方にあり、娘の側にはないのだ、と。もちろん、この小説が娘の解放をうたっているといいたいのではない。原因が特別な出来事でないならば、母と娘の困難はより根源的なもの、避け得ないものになってしまう。安全装置付きの場面が回避させるのは「母が自分の産んだ娘を殺す」場面である。「母に象徴的に殺される娘」と言い換えることもできる「母に愛されない娘」はこうして、「自分」が殺されるのを避けるのである。

3 同じ眠りを眠らない娘

これまで、ほぼ回帰する記憶の場面にしばって、登場人物の側からと、フィクションとしてテキストを読む立場から分析してきたが、この小説全体の理解のためには先行する諸テキストとの比較対照が必要となる。

この小説に「自伝」的要素が濃厚なことは否めない。モンペリエに住むアルジェリアの砂漠出身の女性医師という主人公の設定はモカデムを想起させずにはいない。子供時代の不眠や拒食、両親による兄弟へのえこひいきなどもモカデムの読者にはおなじみのテーマである。また、セルマが、母性をめ

ぐる不安に関して、知り合いの精神科医に「それを書きなさい。彼女、と言いながらそれを書きなさい (100)」とアドバイスを受けることも書き込まれている。これは作家モカデムがセルマという三人称の主人公をたてて自らを語る一種のセラピーとしてのテキストなのだ、という自己定義を装うかのような記述である。

また、2003年発表の『不服従者』には、後の『すべて』の執筆予告も書き込まれている。『不服従者』の語り手かつ主人公（モカデムと同名）はそこで、子供時代のあるドラマを完全に記憶から排除して生きてきたこと、それが、母との関係や不眠や子供を産むことの拒否など、すべての起源になったこと、それを書くことは「もう一つ別の本になる (225)」と述べているのである。ここでは問題のドラマの内容は一切触れられていない。

しかし『すべて』には、無視できない自伝的要素との齟齬もまた含まれている。(ただしここでいう自伝的要素とは先行諸作品やインタビューなどに含まれているものに限らざるを得ない。)すでに指摘したように、主人公の名前は作家とは異なり、職業も同じ医師ではあるが、主人公とは違ってモカデムは腎臓病専門医である。¹⁵こうした点以上に重要なのが父をめぐるフィクションである。モカデムの実父は長寿なのだが、セルマの父は彼女が16才の時に亡くなる。この年齢で父が消えるのは偶然ではない。モカデムの作品世界における母娘関係を理解するためには、父との関係、さらには家族集団との関係をも考察しなければならない。

セルマは嬰兒殺しの場面を目撃した直後に家を逃げ出すのだが、「本能的に彼女はその時家に不在だった父が帰ってくるだろう道の方へ向かった (24)」。そこで隠れていたセルマを4時間後に家に連れ帰るのは父である。暴力の場に父は不在で関わらない。なおかつ、娘を保護する存在である。一方の母はといえば、娘を家から逃走させる暴力の張本人である。しかし、父は問題の

¹⁵ これ以外にも恋人やパートナーの名前、複数の恋愛のいきさつ、母のフランス訪問の回数など先行作品と異なる事項は少なくない。

場面に全く無関係とされているのではない。それどころか、殺された赤ん坊の父はだれなのか、というセルマの（もちろん子供ではなく記憶を取り戻して後のセルマの）問いは、いやでも父をこの場面に引き寄せせる。可能性があるのは父か、当時同居していた叔父（父の弟）かの二人だけなのだから。どちらかといえば叔父という答えを暗示しつつ「もちろん父にも可能だったはず…… (37)」と、テキストははっきりした結論を与えない。母との対決においてもこの問いは問われることがない。

あいまいな安全地帯におかれた父とセルマとは比較的良好な関係を保っている。この小説の3年前に発表された『男たち』は、各章がそれぞれ、語り手「私」（モカデムと同定するのに無理はない）の人生に関わりのあった男性をテーマに書き継がれていくというユニークな形式の自伝なのだが、父を語る第1章は「最初の不在」と題され、「おとうさん、私の最初の男性、傷と欠如というものさして愛を計ることを学んだのはあなたを通してだった¹⁶」という呼びかけで始まる。そして、妻に対し、息子は「私の息子たち」と呼んでも、娘は「お前の娘たち」と呼ぶ父、娘にはお金がないと拒否した自転車を息子にはすぐ買い与え、弟たちの世話にあげられることを要求される娘を懐柔するために小遣いを与えるも、後にだまってその金を使う父への愛憎が語られる。セルマの場合、仕事帰りの父にほほえんでもらえれば「それで充分 (138)」であり、しかも父はこのほほえみを娘に与える。「用心しつつ遠くから彼女は父を賞賛していた。そして父も彼女をととても愛していた (140)」と、セルマは父に承認され愛される娘として語られる¹⁷。この肯定的な関係を維持するために必要なのがタイミングのよい死なのである。周囲がそろそろセルマを結婚させようと画策し始め、彼女が警戒し始めた「その時、死がやってきた。この不幸が、もはやだれも結婚させるために彼女を勉学から引き離したり、ここにとどまることを強制したりできないという確信を彼女に与え

¹⁶ *Mes hommes*, p.11.

¹⁷ こうしたエピソードは『歩く人々』やインタビューなどでも繰り返し語られる。

たということは、彼女が直面した大きな矛盾だった (140)¹⁸。死のおかげで、父に、結婚を強制する役割を与えずにすむのである。一方、父の死はセルマの母との関係をいっそう悪化させたとされる。ずっと屈辱的従属を強いてきた夫に対する恐れが、今度は、今や家族で唯一経済力を持つセルマ (父の死の翌年に職を得る) に対象を移したからというのが語り手の解釈である。

ところで娘の経済力は、先行作品の娘にとって解放の鍵を握ると同時に父との関係における矛盾でもある。学業に秀で、高校時代にはすでに寄宿舎の舎監や家庭教師で父以上の収入を家庭にもたらす存在であった娘は給与をすべて父に渡すことで学業を続ける自由を得るのだがそれは「おとうさん、あなたは私に自由を買い取らせた、昔の奴隷のように¹⁹」という苦い認識を娘にもたらす。セルマの父はこの点でも、娘に金銭で自由を買い取らせる前に死ぬことで娘の苦悩を一つ減らすことになる。逆にいえば、父が消えることでしか父と娘の関係も肯定的にはなりえないのかもしれない。

父にせよ、母にせよ、子との関係が議論されるとき、基本になるのはこの3人による三角形である。しかしモカデムの作品世界において、もちろん娘による父へのエディプス的執着と母との確執を指摘するのは容易だが、この娘と家族集団全体との関係を抜きにしてはその特異性を考えるのは難しい。セルマにとって家族とは「砂漠の監獄的世界 (30)」に他ならない。母娘関係が困難なものしかだが、何より家族集団から脱出して「ついに一人になること (30)」こそが求められるのである。孤独や静寂といったステレオタイプと全く異なる砂漠の伝統社会のあり方、とりわけそこで生きる女の生を書くモカデムについては上記拙論でも考察したが²⁰、その後出版された『不服従者』は、集団として生きるとはどういうことが、きわめて具体的、物理的にその「圧迫感」を描き出していて興味深い。砂漠の縁に住む語り手の小

18 『歩く人々』には、結婚させられそうになったヒロインの必死の抵抗が書き込まれているし (c.f. *Les hommes qui marchent*, pp.260-264.) 『男たち』にも父が結婚を強制しようとしたことが書かれている (c.f. *Mes hommes*, p.20)。

19 *Mes hommes*, p.20)。

20 c.f. 武内「マリカ・モカデム 砂漠からエクリチュールへ (前)」pp.116-117.

さな家には16人がひしめきあって住む。目前に迫る広大な砂漠との対照が著しい。

「まるで生きていると感ずるためには、ぎっしり人間が詰まっていなければならないかのよう。空虚な場、それは外。それは砂漠。それは死。²¹」とりわけ家族の物理的一体化が強調されるのは就寝時の描写においてである。一枚の手織りの重い毛布の下に家族の多くがいっしょに寝る様が、『不服従者』では繰り返し語られる。その毛布はあまりに重く、尿のにおいがしみつき、語り手の息を詰まらせる。語り手はなかなか眠らず、またすぐに目をさます。

「私はただ、毛布の重みを、体の畏を感じる。そこから抜け出すのにとっても時間がかかる。ようやくすわることができる私は他の人たちの眠りを狼狽しつつ観察する。同じ不在によって結びつき、まぶたを閉じ、かれらは腹黒い同盟を形作っていて、私はそこから排除されている。²³」同じ眠りを眠る一つの身体としての家族集団から排除されていると感ずる語り手はそれを嘆くのではない。むしろ、その身体に一体化して窒息するのを避けようと、一人、身を引き離すのである。初めて家を離れ寄宿舎で最初の夜を迎えた時語り手は、「両親の家に寝に帰らなくてもいいのだということに心の底から安堵する。(中略)私はついに家族集団から身を引き離すことができた。私はこの別離なのだ²⁵」と述べる。

思春期の子供の自立願望であることは間違いないが、モカデム世界の娘の家族集団からの逃走には並々ならぬ緊迫感がある。それは、この集団が要求することの娘にとっての耐え難さに比例している。息子たちとのあからさまな差別待遇から強制結婚まで、「伝統」に従うことを要求するのは父や母個

21 *La transe des insoumis*, p.139.

22 尿やおならといった人間の体から出るにおい、また毛布の放つ羊の脂肪のにおいなど、臭覚に関わる記述が繰り返し現れる。

23 *La transe des insoumis*, p.21.

24 “corps familial”. “corps”には身体という意味と集団という意味の双方が含まれている。

25 *La transe des insoumis*, p.157.

人ではなく、家に同居する集団をも超えた親族集団およびそうした集団から成る社会であり、モカデムにおける母娘関係は、父とのエディプスの三角形だけでなく、親族集団の圧力のもとにあることを理解しなければならない。不眠と並んでモカデムのヒロインたちを特徴づける拒食も、一般的な「母になることの拒否」だけではない。「もしお前が私のようにしないのなら、お前は私を否認し私を殺すのと同じ²⁶」と迫るのは、個人としての母も含まれる女たちの集団であり、その女たちはひたすら息子を持つことを願う「女嫌い」である²⁷。集団に一体化する伝統的な女になることを「女の手で作り上げられる体²⁸」と表現するモカデムは、不眠によって毛布から抜け出したように、拒食にもよってこの体に同一化することを拒否する。

こうした女たちの中で唯一の例外は、同居する父方の祖母である。もと遊牧民のこの祖母と孫娘との関係については拙論でも取り上げたが、『不服従者』でも家族における唯一の理解者として愛情を込めて描かれる。『すべて』では祖母に関する記述は少なく²⁹、むしろ、セルマは、祖母が嬰兒殺しの現場にいなかったことを記憶の中で確認し安堵する。事件そのものには関わらない祖母だが、殺人とその目撃というエピソードの起源にはこの祖母がいる。モカデムの第2作『いなごの世紀』は自伝的要素が前面に出ないフィクションだが、ヒロインは幼くして、母がゆきずりの男に殺される場面を目撃する。その後少女は失語症に陥る。『不服従者』にはこのエピソードの「種明かし」があり、父方の祖母が幼い頃、家族の不在中に母が突然死（病死）するのを目撃し、その後不眠ならぬ過眠に陥ったことが『いなごの世紀』の殺人目撃のシーンを生み出したとされる³⁰。幼かった祖母の受けた衝撃の大きさを表現

26 *ibid.*, p.118.

27 「子供は何人」と聞かれた女たちが「3人だけ。それから娘が6人」という答え方をするのを『男たち』の語り手はしばしば耳にする。「娘は決して子供ではない (*Mes hommes*, p.12.)」のである。

28 *La transe des insoumis* p.170.

29 同居する父方の祖母の他、母方だが血のつながりのない祖母（母の継母）との良好な関係も書き込まれている。

30 *c.f. La transe des insoumis*, p.201.

するためには「殺人」という形式がより有効だったと読むこともできるだろう。これまでも繰り返してきたようにモカデム自身の目撃体験が「事実」か否かは断定不可能だが³¹、テキストに現れる「殺人の目撃」に限っていえば、それは祖母と孫娘に同じ役割を与え、二人の間の絆を強化する機能を果たす。家族の他のメンバーとは差異化によって遠ざかろうとするモカデムあるいはセルマも、遊牧民であった頃の記憶の守り手でありすぐれた語り部である祖母からは語りを受け継ぎ、それが書くという仕事の起点をなすのである。

4 逃げ去る母

「母による殺人の目撃」が娘に何をもたらすかを追求する『すべて』は、この衝撃的できごとを社会問題の視点からも語っている。母との対決の次に来る第6章は語り手による、ほとんど政治的パンフレットのような社会批判で始まる。「家で生まれ家族に窒息させられた赤ん坊がこの国には一体何人いるだろう (76)」と、この個人的ドラマがアルジェリア社会の持つ根深い問題と不可分であることを語り手は指摘し、私生児など一族の望まない子供を抹殺するよう母たちに強制する集団的圧力の存在を正面から批判する。「家族の専制と国家の専制 (78)」が「いっしょになって原理主義の野蛮の温床をつくっている (78)」と述べる語り手は、嬰兒殺しだけでなく、その背景ともなる強制結婚や恋愛の禁止なども視野に入れている。セルマも、それ以前のモカデムのヒロインたちも、学生時代の恋人は結局家族の圧力に負けて彼女らを捨て、一族の準備した結婚をする。

ところでこうした社会問題を語る言説は、小説として見た場合、いささか浮き上がった印象を与えることは否めないのだが、この小説の中では別の機能をも果たしているのではないだろうか。「恥辱と不名誉という脅迫のみが一族に殺人を決定させた。母は実行役にすぎなかった (84)」という一節な

³¹ 事実であれば自身の体験の変形と考えることもできる。『いなごの世紀』執筆時にすでに記憶が回帰していたとすれば意識的な、していなかったとすれば無意識的な変形。

ど見られるように、社会批判は、母をそこへ追い詰めた圧力を断罪することでむしろ、母個人を完全に免責するとは言わないまでもその責任を軽くするように働くのである。

またこの小説には、セルマの家族とは別のもう一つの母娘関係が書き込まれていることも指摘しておきたい。母と対決しての帰途、アルジェリアからフランスに向かう飛行機でセルマはファティハと名乗る女性と隣り合わせるのだが、彼女のエピソードもまたアルジェリアの抱える諸問題を例示するためにあるかのようである。家族との軋轢、兄弟による搾取、外国への脱出といったセルマとも多くの共通点を持つこの登場人物がセルマと異なるのは、16歳の時私生児として娘を産んでいることである。この娘は生まれてすぐ、家族の手で連れ去られ子供の産めないある女性に与えられてしまう。セルマ同様、今回数十年ぶりにアルジェリアを訪れたのは、兄がこの娘の消息を得たと連絡してきたからなのだが、それは金に困った兄がファティハを呼び出そうとしてついた嘘であり、ファティハは監禁されそうになってかろうじて脱出してきたところなのである。セルマを相手に人生を語るファティハはフランスに着く時には、今度こそ弁護士をたて、正式に娘を捜すことを決意する。ここで語られるのは、意志とは無関係にいったんは娘を見捨てることになった母が、娘を見い出そうと決意する物語である。「娘を探し求める母」はセルマが必要とする母でもある。この章に先立つ第8章は、15年前の母のフランス訪問の回想だが、母は娘の生活について何一つ質問しようとせず、知ろうとしない（訪問の目的はセルマの妹たちの結婚準備の買い物と金銭的援助の要求である）。今回の帰郷でも母がセルマの人生について一切興味を示さないことに彼女は傷つく。一見、社会問題提起のためだけに付け足されたようなファティハの物語も、この視点から読むと、娘の求める母、すなわち「娘を求める母」を提示する仕掛けともなっているのである。

³² ファティハはセルマの勤務する病院で看護師として働いておりセルマを見知っている。セルマはファティハを知らない。

母から逃走し、かつ母に求められることをも欲望する娘にとって母との同一化はどのような問題としてあるのだろうか。不眠と拒食についてはすでに見たが、最もストレートに母との同一化が問題になるのは妊娠や出産においてである。セルマは母になること、子を産むことを拒否し続けてきた。その拒絶は、何度も確認するかのようにテキストに現れ、セルマと母とをしっかりと区別しようとするかのようなのである。母の妊娠は「果てしのない (99)」と形容されるほど繰り返される。³³そしてこの妊娠はその度に、世話をすべき弟妹を増やすのである。それだけではない。周囲の女たちによるお産の話、特に、決して珍しいことではなかった出産時の死の話はセルマを怯えさせる。「何度彼女は、母の大きなおなかを見つめながら、お産で死ぬという表現に恐れおののいたことだろう (100)」という文中で、恐れられているのは母の死なのか、彼女自身の死なのか。この恐れの本底には出産時のアクシデントだけでなく、自分が母と同じ身体を持つこと自体に対する根源的な恐れがあるように思われる。

母の娘であることは否定できないとしても、母のようにならないためには、自分に対する母の役割を最小限にしておくことも有効だろう。セルマが生まれた時、母乳が出なかったため、セルマは山羊の乳で育てられる。このエピソードをセルマに語るのは母ではなく、母の継母（セルマの母は生まれた時に母を亡くしている。彼女は「母を殺した」娘なのである）、つまり血のつながっていない祖母である。しかも、幼いセルマが大人のような口をきくことを山羊の乳を飲んで育ったからだと言うのである。母の乳を受け取らない（しかもその「責任」は娘の側ではなく「母」の側にある）ことで、母との間にいっそう距離をおけるばかりでなく、かわりに優れた言語能力を得たというわけなのだ。相次いで生まれた弟妹に母が絶え間なく母乳を与えているのを知るセルマにはこの「特殊性が気に入っている (137)」。セルマの持つ

³³ モカデム自身は13人兄弟の長子であり、子供時代、記憶にある限り母はいつも妊娠していたと述べている。

「特殊性」について『すべて』の語り手は、学生時代の友人グミに、「君たち（セルマと弟妹たち 筆者注）は同じ母親を持たなかったみたいだ（53）」と言わせている。セルマ自身による母の否認を、他者の視点から補強するのである。

しかしこの小説は、娘による母の否認や同一化の拒否のみを語ってはいない。同一化は、自分も母親になることのみを通じて行われるのではない。家族から、アルジェリアから逃走し、苦勞を重ねて人生を切り開いたセルマの選択を、語り手はこうも表現する。

「彼女なりの方法で、セルマもまた耐え難きものを窒息させたのだった（96）」

母にとって、耐え難きものは不名誉な私生児であった。セルマにとって家族やアルジェリア社会による抑圧こそが耐え難きものだった。赤ん坊の場合とはかく、セルマの場合、目的語の内容から考えて「窒息させる」という表現は一般的ではない。母と娘の関係を決定的に破壊したとされるまさにその身振りを示すこの動詞をここであえて用いることは、娘による母の否定を超えてなおかつ存在するこの関係を暗示していると考えられるのではないだろうか。

ある母娘関係が、娘の側から激しい批判にさらされているのがこの小説であることはたしかだが、そこで母は、ひたすら娘の批判を正当化するように描かれているわけではないことに注意しなければならない。拍子抜けするような母との対決は、回帰した記憶の信憑性を証してくれるとはいえ、娘の側に何らかの解決をもたらしはしない。クライマックスになってもよい場が小説のちょうど中ほどに位置する上、その後のテキストも、必ずしもこの対決の結果をめぐる展開するわけではない。決定的な決裂も和解もない。娘は今まで母から逃走し続けてきたのだが、再度の対決が実現する前に死ぬことで「今度は、永遠に逃げていったのは母の方（149）」となる。記憶の回帰に始まり母の死に終わるこの小説は、母娘関係の起源にある「犯罪」を追求

するように見えてそれを果たしてはいない。セルマが断罪するのは嬰兒殺しである以上に、これまでの母娘関係の全体である。セルマが母に真につきつきたいと望む質問は「赤ん坊を殺したのか」でもなければ「なぜ殺したのか」でもない。「なぜ私を十分に、すなわち私が望むほどに愛してくれなかったのか」である。そして断罪には常に、愛されなかった娘の罪悪感が伴っている。このテキストが果たすのは、母を他者の位置に置き直すことでそうした断罪と罪悪感の絡み合いから娘を解放することではないだろうか。母は、この小説において、最大の謎にとどまる。子供時代の回想においても、先行諸テキストの場合と異なり、セルマの場合、母との対立よりはコミュニケーションのなさが強調されている。「母は彼女の前で黙ったままだった。いつもこうだった (79)」し、「一生彼女たちはお互いの沈黙を交差させることしたしてこなかった (107)」。記憶の回帰をきっかけに娘の試みる言葉の交差は中途半端に終わる。だが解決のない小説は、娘が母の他者性とでもいうべきものを受け入れていく過程と読むこともできる。母娘関係は「解決」しない。このテキストは逃げ去る他者、ついに到達不可能な他者として母を書く。娘にできるのはそこまで、と言うかのように。

おわりに

母を断罪することは、結局不可能なのだろうか。この小説は、母を断罪する最終審であるより、むしろ、こう問いかけるかのようなのである。自伝として読むことにも無理のないテキストだが、嬰兒殺しを糾弾しつつ、上にみえてきたようにさまざまな方法で母を「免責」する。

「私はすべてをあなたを忘れることに負っている」というタイトルの意味に戻るならば、まず、この衝撃的事件の記憶を封じ込めることで私は生き延びてきた、という解釈が成り立つ。そのかわり、異常な母娘関係ができあがってしまった、というわけである。自伝的解釈から離れるなら、この小説は「母を忘れる」ことを正当化する物語だと読むこともできる。母から逃走す

る娘、母を拒否し母を忘れることによってしか自分を生きられない娘に必要なフィクションとして。従って、「象徴的母殺し」物語の系譜に連なると言うことはできるだろう。ただ、このテキストはその「象徴的母殺し」を乗り越えて自己解放していく娘を肯定しているのはたしかだが、母の側もまた逃走する他者として書く地点へと向かう。物語の中に「解決」はない。しかし母との関係を書き直すこと自体はいったん達成されるのである。

アルジェリアの抱える社会問題としての嬰兒殺しという視点から考えるならば、たしかにこの問題を正面から、しかも自伝と読まれても無理はないテキストの形で提出する例は珍しい³⁴。しかし、語りの視点は一貫して、事件を目撃する主人公にあるため、殺す側にとってこれがどういうことかになるのか、読者も主人公同様、母の謎を解明することは難しい。さらなる追求には殺す側からの語りが必要になるだろう。それは文学にこそできる問題提起かもしれない。

この小説のアルジェリア社会批判の中で、同様のテーマを扱う他のアルジェリア出身女性作家との違いが最もはっきり現れるのは女性への批判的まなざしである。一般にアルジェリアをめぐる言説において、たとえ国家や社会が厳しく批判される時も、女性は未来への希望を担うものとして肯定的に語られることが多い。女性作家たちの作品やエッセイにおいても同様である。抑圧的な母が問題になることも多いが、女性どうしの連帯を称揚するものも少なくない。モカデムは、こうした傾向を熟知した上で、それを正面から批判する。親族や近隣の、伝統的な生き方をする女性たちが抵抗することもなくそれを受け入れ、制限された生活の中で肥満を始め健康に問題を抱えることを、同情的というよりはるかに批判的な言葉で語るだけではない。「アルジェリアは女性によってしか苦境を脱することはできないだろう、というフラン

³⁴ モカデムと同じアルジェリア出身のアシア・ジェバルには、母による娘の殺人を思わせる短編がある。男性との交際を疑われた大学生の娘を、家族の圧力のもとに母がベランダから突き落とす名誉殺人の一種。ただし、殺人の場面自体は暗示されるにとどまる。c.f. Assia Djebar, "Retours non retours, Mère et fille-3" in *Oran, langue morte*, Actes Sud, 1997.

スやそれ以外でくどくどと繰り返されるこの決まり文句はセルマをいらだたせ (84)」、安易な「女性の連帯」幻想に疑問を投げかける。

アルジェリアを離れてこそ自分の人生を生きることができたと認識するセルマ同様、作家モカデムもアルジェリアからの「逃走」があって初めて生まれた。だが、そのテキストは絶えずアルジェリアへ戻る。これまでに発表されたどの作品においても、作家のまなざしは海の向こうを見つめている。「すべて」が、母娘関係からの逃走をめぐる物語だとしたら、それを書き終えた地点から、次に作家はどの方向へとまなざしを向けるだろうか。

Malika Mokeddem の作品

Les hommes qui marchent, Ramsay, 1990; Grasset, 1997.

Le siècle des sauterelles, Ramsay, 1992.

L'interdite, Grasset, 1993.

Des rêves et des assassins, Grasset, 1995.

La nuit de la lézarde, Grasset, 1998.

N'zid, Seuil, 2001.

La transe des insoumis, Grasset, 2003.

Mes hommes, Grasset, 2005.

Je dois tout à ton oubli, Grasset, 2008.